

「石川幼年美術の会」設立の背景および2年間のプロセス

— スタッフの変容 —

森 田 ゆかり*

Background of the Establishment and 2-year Process of "Ishikawa Children's Art Association"

— Transformation of the Staff —

Yukari Morita

I はじめに

「幼年美術の会」は1963年に京都で設立され、翌年1964年に「第1回夏季大学」を滋賀県比叡山延暦寺会館で行っている。「夏季大学」はその後54年間にわたり毎年開催されているが、それだけにとどまらず、それぞれの地域で保育者や小学校教員などが主体となり40年、50年にわたり脈々と実践研究が受け継がれている。「一人ひとりの子どもの心が育つ‘表現’」というテーマのもと、学習指導要領、幼稚園教育要領、保育所保育指針などを踏まえ、子どもを中心に捉えた学び、豊かな人間形成のあり方を参加者全員で思索、実践し、交流を積み上げていく会である。

石川ではこのような文化や学びの場がなく、他の地域で40年、50年にわたり実践が行われている事実すらほとんどの保育者は知らず、とても残念に思っていた。ないものは創るしかない。筆者はここ数年全国各地で行われている様々な保育者向けの研究会などに参加してきたが、その中で「幼年美術の会」に注目し、香川、滋賀、京都での研究会に参加し、その取り組みをモデルに2017年11月、「第1回 石川幼年美術の会・実践研究会」開催に至った。

本稿では2016年11月まで遡り、設立の背景および2018年10月に開催した「第2回 石川幼年美術の会・実践研究会」までのプロセス、特にスタッフの変容について纏めたい。

II 設立の背景

本学幼児教育学科では2010年度より「出張講座」という取り組みを行っているが、子どもの造形表現に関する講座依頼が年々増え、十分に応えられない状況となっている。例えば2016年度の場合、①「子どもの絵は身体と心のメッセージ みかた・考え方が変わると子どもの表現を見るのが楽しくなる」、②「子どもの思いと保育者の願いが重なる造形活動のヒント」、③保育者自身が造形

*金城大学短期大学部幼児教育学科

活動が楽しい！面白い！’と感じるために」というタイトル例を示し案内を送ったところ、4月の時点ですでに依頼が10件を越えてしまい、残念ながらそれ以降断らざるを得ない状況となった。多くの保育者が子どもの造形表現に関して戸惑いや疑問、苦手意識を感じていること、機会があれば「学びたい」という思いを持っていることがひしひしと伝わってきた。そして、抱えている課題の根は概ね共通していることも分かってきた。

保育現場で小学校教育を先取りするような動きがあること、大人の概念で子どもの表現を見ていることも気になった。造形指導は見栄えのよい作品を作らせることが目的ではない。単なる技能指導でもない。小学校就学前の乳幼児期にこそ大切にしたいことがある。例えば、五感を働かせ多様な素材に触れること、多様な経験をすること、生活の中で子どもが安心して自己を発揮できること、没頭して遊び込むことのできる環境が用意されていることなどである。「そうは言っても（見栄えのよい作品を期待する）保護者の眼が気になる」という保育者の心情も十分に理解できる。造形は形になり見えるからである。しかし見えるからこそ、子どもの造形表現を通して小学校就学前の「子ども」というものへの理解、保育・幼児教育への理解につなげることもできるはずである。

まずは、造形表現に関して戸惑いや疑問、苦手意識を感じている保育者が、広く、ともに学び合うことのできる場を創りたいと考えた。「幼年美術の会」は造形を通して子ども、保育を考える場である。また、同会が最も大切にしている「絵を読む会」をぜひ石川でやりたいという願いが、石川幼年美術の会を設立したいちばんの理由であった。クラスの子どもが描いた絵を持ち寄り語り合うことにより、子どもの育ちや思いが見えてくる。保育を振り返ることにつながり、保育改善のヒントが見つかるのである。

Ⅲ プロセス 2016～2017

1) 2016.11.1 はじめの一步

「第1回 石川幼年美術の会・実践研究会」開催の1年以上前の出来事である。卒業生へのリサーチで、研究会は保育者が超多忙な時期を外し11月上旬開催を考えた。開催予定地・白山市の諸々の取り組みとバッティングしないよう白山市子ども子育て課に確認の電話を入れた。すぐに白山市保育士会会長にも伝わり「会場が取れなくなるとは大変」との判断で、白山市民交流センターを仮予約してくださった。自分事として動かれた気持ちをありがたく受けとめ、会場はそのまま白山市民交流センターに決定した。自然な流れで翌日、子ども子育て課と白山市保育士会に「趣意書」を提出し、保育士会が応援して下さることになった。「はじめの一步」を支援して下さる方々の存在はとても心強いことであった。

2) 2017.5.24 第1回スタッフ研修会 有志が集まる

白山市保育士会を通して「乳幼児の造形活動に興味・関心のある方、学びを深めたいと考えている方、保育実践へのつなげ方に悩みを感じている方、そして11月の実践研究会の企画・実行に関わっていただける方」と声掛けしたところ、有志が20名以上集まった。

参加者全員の自己紹介の後、グループワークで子どもの造形表現活動に関して「困っていること」「学びたいこと」を聴き合うことから研修はスタートした(右写真)。後半はクレヨンによる造形遊びも楽しみながら、どのような実践研究会にしたいかを率直に話し合った。



<グループワークより>

困っていること		学びたいこと
題材	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容がマンネリ化している。新しいものを取り入れたいが何をつくれればよいか? どうすればよいか? ・ 年齢に合った造形遊び 年齢ごとにどんな経験をさせていけばよいのか? 今やっていることが年齢、発達に合っているのか? 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 年齢・発達に応じた造形遊び
指導	<ul style="list-style-type: none"> ・ 導入が難しい。子どもが「やりたい」と思えるような導入は? ・ 絵を描きたがらない子ども、興味のない子ども、苦手な子どもに対する声掛け・援助。 ・ 絵を描いたり、製作することは楽しいという気持ちもてるようにするにはどうすればよいのか? ・ 絵画の指導方法 ・ クレヨン、マーカー、絵の具など画材によってどんな造形活動ができるか。 ・ 造形をどのように遊びに取り入れたらよいか? ・ 子どもが活動しやすいように準備するのが難しい。 ・ 人数の多い保育所・園で造形遊びするのは難しそう。 ・ 発達に応じた道具を使わせないといけないのか? ・ グループで進めるか、全員で進めていくか? ・ 人の真似をする子どもへの声掛け 自由に描いていいと伝えると止まってしまう。自信を持って楽しく描くためには? ・ いつも同じ絵ばかり描いている子どもが気になる。 ・ いつも小さく描く子どもにどう伝えてよいか ・ 年長になっても人が描けない。漫画になってしまう。 ・ 子どもが描いた絵はすべて褒めればよい? ・ 母の日の似顔絵が人の顔に見えないけれど、どこまで声を掛けて良いのか? ・ 器用、不器用は個人差が大きく、友達と比べるようにな 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもが「楽しい」「やりたい」と思える活動、造形遊び ・ 苦手な子、興味がない子への対応 ・ 子どもが意欲的に取り組める環境 ・ 想像力が豊かになる造形遊び ・ 各画材の年齢別の具体的な遊び方 ・ 楽しく主体的に造形遊びができるように、どの段階でどのような経験をさせてあげればよいか ・ 異年齢での活動でも楽しめる遊び

	<ul style="list-style-type: none"> ると苦手意識が出てくる。 ・ 何度も失敗してしまう子の声掛けと対応 ・ どうしても「上手に」「きれいに」「ていねいに」を求めてしまう。 	
汚れを嫌がる	<ul style="list-style-type: none"> ・ 服などが汚れることを保護者が嫌がる。汚れることを嫌がる。手が汚れることを嫌がり触れたがらない。 	
経験画、季節の作品、おもいで帳	<ul style="list-style-type: none"> ・ 運動会や遠足など思い出して描くことが苦手な子がいる。経験画は描いた方がいいのか？ ・ 0, 1, 2 歳児の製作（行事用）は必要なのか？ ・ 「季節の作品」や「おもいで帳」にいつも苦労している。やらせっぽくなっている。 	
低年齢児の造形遊び	<ul style="list-style-type: none"> ・ 0,1 歳児は口に入れてしまう心配から何もできない。 ・ 月齢差が大きく、内容を考えるのが難しい（1 歳児）。 ・ 低年齢でのクレヨンなどの使い方、使い始める時期について 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 未満児（0, 1 歳）でも楽しく安全にできる造形遊び、絵の具遊び
展示、作品に対して	<ul style="list-style-type: none"> ・ 出来上がった作品の認め方や声の掛け方。その子の思いを汲み取っての言葉掛け。 ・ 作品の飾り方、見せ方。 ・ 見栄えが気になる。年長などで展示する機会があるととも差が出てしまう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 展示方法
時間が不足	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一人一人とじっくり関わりたいが、思うように時間が取れない。造形を取り入れる時間がない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 限られた時間でも楽しく描けるコツ
材料の不足	<ul style="list-style-type: none"> ・ 製作に必要な材料が十分でないことがある。 	
経験不足、勉強不足	<ul style="list-style-type: none"> ・ 園全体として絵を描く経験が少ない。 ・ 保育者自身が造形に対して勉強不足。基本的なことが分からない。楽しみ方が分からない。苦手意識をなくしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 保育士自身の知識を増やしたい（道具の使い方、画材の選び方など）

3) 2017. 8. 29 第 2 回スタッフ研修会 有志が増える

嬉しいことにメンバーが増えていた。「夏季大学」や香川、滋賀、京都での研究会の写真をお見せしながら、筆者の眼から見た「幼年美術の会」の魅力について語った。

ワークショップでは『「こまった…」を「たのしい!」「おもしろい!」に変える工夫』と題し、和紙染めを楽しんだ。子どもの表情や行為を「見る」、言葉を「聴く」、心動かしている瞬間に立ち会うことができるように、そして保育者自身も楽しむことができるように、余裕をつくりだす工夫を紹介した。

折り畳んで染めた和紙を広げる時、2人で広げると広げやすい、破れにくいというメリットもあるが、広げてみるまでどうなっているか分からないドキドキ・ワクワク感、偶然生まれる美しさ・面白さを他者と共有できる嬉しさがある。11月の「実践研究会」も蓋を開けて見るまでどのようなものになるのか分からない。スタッフにも、未体験のこと、イメージできないことに関わる不安の表情が見られた。不安の声も聴き、それを共有しながら、ともに創りあげていこうと話した。

4) 2017.11.11 第1回 石川幼年美術の会・実践研究会



「絵を読む会」について特記する。石川県内の参加者のうち「絵を読む会」に参加したことのある者は、筆者を含めわずか3名であった。幼年美術の会副会長であり京都幼年美術の会会長（当時）でもある奥山淑子先生はじめ6名の京都の先生方が、グループの進行（ファシリテーター）および助言の役割を引き受けてくださった。滋賀幼年美術の会会長・黄瀬重義先生も駆けつけてくださり、「絵を読む会」に先立ち7名の先生方の紹介を兼ね「幼年美術の会」のこと、「絵を読む会」のことを語っていただく時間をつくった（左上写真）。一からスタートする石川幼年美術の会にとって、「かたち」ではなく「本質」をお聞きし、温かい会の雰囲気を感じ取る貴重な時間となった。

参加者が持参した絵、京都の先生方が持ってこられた絵を見ながらグループごとに語り合い共有することにより、日頃の保育の振り返りになり、多くのヒントが見つかった。（右写真）

参加者からの感想は詳細に書かれていた。「次回も参加したい」「次回はスタッフとして企画段階から参加したい」という声も多数あった。

参加者からの感想は詳細に書かれていた。「次回も参加したい」「次回はスタッフとして企画段階から参加したい」という声も多数あった。

第1回 石川幼年美術の会・実践研究会

日時 2017年11月11日（土）9:00～16:30

会場 白山市民交流センター

参加者 100名

主催 石川幼年美術の会

共催 白山市保育士会

後援 公益財団法人 美育文化協会

協力 金城大学短期大学部

協賛 ペんてる株式会社

内容

《実技研修》 講師：大塚義孝先生（110分）

「クレヨン・パス・コンテを遊ぶ」

《特別講演》 講師：大橋功先生（90分）

「子どもの思い、保育者の願いが重なる造形活動」

《絵を読む会》 子どもの絵から保育を語る（120分）

世界児童画展（同時開催）



IV プロセス 2018

1) 2018.5.19 13:30~16:30 第1回スタッフ研修会 46名が学び合う

4月中旬、「第1回実践研究会」参加者100名からスタッフを募ったところ、登録者は54名になった。「第1回」に参加した27名の他に「参加していないけれどスタッフになりたい」という押しかけ希望者が27名いた。その思いを尊重し、予想外の展開になったが、とてもありがたく心強かった。

第1回スタッフ研修会には46名が集まった。子どもの造形表現活動について「学びたい」という思い、「よく分からない」「どうすればよいのだろうか?」という戸惑いの声を拾いながら、研修のあり方、内容、方法などを考え、かたちにし、地域や所属を超え、楽しく、ともに学び合うことのできる場を目指すことにした。「実践研究会」当日だけではなく、そのプロセスに大きな意味がある。研修内容は以下の通りである。

○ 絵の具に関する基礎知識

知っているようで実はよく分からずに使っている絵の具類・筆・水入れ・混色などについて改めて学び、その後、初めて自分の絵の具を使う5歳児の気持ちになって遊んでみた。

○ 「絵を読む会」について学び合う

「第1回実践研究会」参加者の体験、当日の各グループの記録をもとに、スタッフがいずれ「絵を読む会」の進行役（ファシリテーター）をできるように、京都幼年美術の会の先生方6名が大切にされていたこと、やり方などについて話し合い共有した。進行マニュアル（案）を作成することになった。

2) 2018.7.7 13:30~16:30 第2回スタッフ研修会 「絵を読む会」最初のつまずき

第2回は、進行マニュアル（案）に沿って実際に「絵を読む会」をやってみる研修であった。「可能な方は、自分の関わった子どもの作品を5枚以内ご持参ください」とお知らせしてあったのだが、子どもの絵を持参する保育者がとても少なかった。まずここで最初のつまずきがあった。絵がなければ「絵を読む会」は出来ない。

「初めてのこと」をする時にはイメージできないこと、戸惑いがあるが当然である。「なぜ持って来れなかったのか」を否定的に捉えず、不安や戸惑いの気持ちを聴きながら理由を探り、共有し、戸惑いながらも持参した保育者のクラスの絵を見ながら、とにかく「絵を読む会」をやってみた。なぜ石川で「絵を読む会」をやりたいと考えているのか、どんな会なのか、保育者自身が体験の中から感じ取られたように思う。クラス担任でない方を除き、ほとんどの保育者が「次回は絵を持って来たい!」とワークシートの感想を結んでいる。

《ワークシートより》

- ・ どんな絵を持ってきたらよいか悩みました。(同感想多数)
- ・ 今回、迷いながら絵を持ってきた。これは「絵」に入るのかどうなのか? 絵を見せ意見をもらうことで雰囲気味わうことができた。園でも絵を読む会を実践してみようと感じた。
- ・ 実際に自分の持っていった絵を皆さんに読み取ってもらって、自分では想像できない意見が聞けたり、アイデアをいただいたりと、とても良い時間でした。自分のクラスの子どものつぶやきに耳を傾けていきたいと思います。

- ・ 最初は緊張しましたが楽しかったです。「どんな絵がいいのかな？」という思いもあり、他の事情もあって今回作品を持って来ていなかったのですが、次回はぜひ持って来て、皆さんと一緒に読んでみたいと思いました。自分の見方と違う意見があるのかな、と楽しみです。
- ・ 自分の思い（本音）や悩みを聞いてもらえた。
- ・ 絵を通して、保育やその子の話もでき、自分の保育を見直すいい機会を持って良かったです。
- ・ 描かれている絵の背景や状況を保育士がよく把握していることで、子どもの心もちが理解できると思いました。その行為に意味があり、思いを探ろうとすることは大切だと思います。子どもが描きたくなるような保育体験をどうしたらよいか考えるきっかけにもなり、造形活動はとて奥が深いと感じています。知れば知るほど難しいですが、保育の原点にたどり着きそうです。絵を読める人になりたいです。
- ・ 「絵を読む」というと難しいと思い構えてしまいましたが、他の先生方からどンドン活発な意見が出て、「こんな感じでいいんだな」と思うことができました。他のグループとの共有でも、感じたことのある悩みばかりでとても参考になりました。
- ・ 今回ファシリテーターもどきに挑戦。とても苦手なことなので進め方の「案」があっても助かりました。絵を持って来てくれた方が説明し、日頃の疑問も提示してくれたり、それらに関して同じ年齢を担当している方々が意見を次々と伝えてくれたりして、まわりの方々に助けられました。話がはずんでよかったのですが、反面そうならなかったら…と思うと不安もあります。絵を持って来ていない方も。今度持って来てみようと思ってもらえたのでは…。
- ・ 時間の配分や会の進行をするファシリテーターの重要性を改めて感じた。人数は丁度よく感じ、自分が感じたこととは全く違う捉え方をされている方もおり、とても勉強になりました。
- ・ それぞれの絵を見ることはとても楽しく、共感できる部分がたくさんありました。悩みもよく分かり、森田先生の話でスッキリすることができました。子どもの絵を尊重することの大切さを改めて感じました。いつも森田先生が言ってくださる「正解がない」の言葉に安心できます。
- ・ 子どもの絵を見て、担任の話を聞きながら、「なんでだろう」と考えることが楽しいです。他の方からもいろいろな意見が出てくることで、もっと想像がふくらんで、子どもの絵って深いなあーと思います。
- ・ 回数を重ねるうちに、どんな絵を持参すればよいか、どんなところを見ればよいか少し分かってきたように感じる。子どもが絵を描いている様子や、子どものつぶやきなど、いろいろなことを聴き、話し合いを聴くことで、改めて子どもってすごいなあーと感じました。
- ・ これからも何度でも「絵を読む会」をしていきたい。話をする中で、いろいろな方向からの考えが聞け、参考になる。

3) 2018.9.1 13:30~16:30

2018.9.10 13:30~16:30 第3回スタッフ研修会

スタッフ登録者は65名になった。諸般の事情により「第3回スタッフ研修会」は二手に分かれ、2週連続で開催された。9月1日はおもに白山市の保育者など25名が参加。「スタッフであること」の意味について再確認し（単に「実践研究会」当日の「お手伝い」ではない）、4グループに分かれ2回目の「絵を読む会」を行った。ほとんどの保育者が子どもの絵を持参し、「絵を読む会」の良さ

も実感できたようであった。二手に分かれ開催したことにより、それぞれのメンバー構成に合わせたねらいが生まれ、小規模ならではの面白さもあった。10月27日開催の「第2回実践研究会」の概要(案)についても話し合った。

4) 2018.10.6 13:30~16:30 第4回スタッフ研修会

第2回、第3回、第4回の研修を通して15名が「絵を読む会」のファシリテーター役を1,2回体験した。ファシリテーター役以外のスタッフも、絵を持ってこること、絵を読むこと、絵を通して子どもや保育のことを語ることに少しずつ慣れてきた。京都幼年美術の会の先生方6名からの学びをもとに「とにかくやってみる」ことを大切にしてきたが、回を重ねるごとに自然体に近づき、「絵を読む会」の楽しさも分かってきて、何とかやれそうな手応えを感じた。

5) 2018.10.27 第2回 石川幼年美術の会・実践研究会

参加者の感想にも書かれているが、「実技」「講演」「絵を読む会」「世界児童画展」が参加者の心の中でつながり一体化する研究会になった。

《参加者の感想より》

- ・ 「実技」「講演」「絵を読む会」と盛り沢山だったが、全てがリンクしていて、おもしろくて勉強になりました。
- ・ ‘自由な表現’という一貫性のある実技、講演で、今後の自分の造形活動の参考になった。現場にいと「(子どもの)自由な表現を受け入れたい」という自分の思いと「見栄えの良い作品を」という周囲や保護者の思いとの間で板挟みになってしまう。このような研修や研究を通して説得力のある知識を身につけて周囲を納得させられるように、子どもたちの自由な表現を認めてもらえるようになっていけたらと考えた。
- ・ 子どもの絵を通して、子どもを知る、保育を見直す、子どもの表現にはすべて意味がある、ということを実感しました。
- ・ 大橋先生の講演で『子ども「ひとり」「ひとり」が そのかけがいのない《じかん》をみんなで《いきる》ことを私たちは大切にしてきたか?』という言葉が心に響きました。今を一生懸命生きる子どもたちが自分の思いを絵に表現すること、本当に大切にしていきたい‘じかん’です。

「絵を読む会」について特記する。スタッフ研修を重ね「自家製」では初めての「絵を読む会」であった。スタッフ11人が勇気を出してファシリテーターに挑戦したことにより、1グループの人

第2回 石川幼年美術の会・実践研究会

日時 2018年10月27日(土) 9:00~16:30

会場 金城大学・笠間キャンパス医療健康学部棟

参加者 124名

主催 石川幼年美術の会

後援 公益財団法人 美育文化協会

協力 金城大学、金城大学短期大学部、白山市子ども子育て課、かほく市子育て支援課

協賛 ペンてる株式会社

内容

《実技研修》 講師：大塚義孝先生 (90分)

ゆびえのぐを遊ぶ

《特別講演》 講師：大橋功先生 (90分)

子どもの真実に寄り添う造形活動

—保育改善の視点とヒント

《絵を読む会》 (160分・途中休憩2回)

グループによる絵を読む会 (110分)

共有とまとめ (40分)

世界児童画展 (同時開催)

数が 11 人程度と話しやすく、聴きやすくなり、とても和やかな会になった。各グループにスタッフ約 4 名を配置し、スタッフが率先して絵を持参したこと、積極的に楽しく話し合う空気を創り出したことが、ファシリテーターを支えた。リーダーも参加者も輝いていた。

「絵を読む会」で語り合うことにより多くのヒントを得ることができたが、「どうなんだろう?」「どうすればいいんだろう?」という疑問も残った。付箋に書き出し、特別講演の講師・大橋功先生と筆者が約 40 分かけて共有とまとめをした。正解はない。あくまでも「かもしれない」というまとめである。困っていること、迷っていることについて話しているのに、この笑顔はどうだろう(右上写真)。オトナ概念から解放され、こどもの表現を楽しんでいる。



「絵を読む会」を重ね、その文化が少しずつ根付き、誰でも気軽にファシリテーターができるようになることが次なる夢である。そうなれば園内で日常的に「絵を読む」ことができる。

5) 2018.11.24 14:00~16:00 第 5 回スタッフ研修会

「第 2 回 石川幼年美術の会・実践研究会」の振り返りと、スタッフとしての自身の変容を纏めた。
《スタッフとしての自身の変容》(下線は筆者が追加)

○ 2016, 2017 年度からのスタッフ

- ・ ファシリテーターは初めてだったが、メンバーの方々が前向きな意見をどんどん出してくれたのでよい話し合いになった。達成感がありありがたかった。「絵を読む会」を園でもやってみたいと思うようになった。
- ・ 実現できないかもしれないが、(園内で)自分は何ができるか考えるようになった。
- ・ スタッフと参加者の境界線がゆるやかで、そこが良いところでもあるかと思います。

○ 2018 年度からのスタッフ

- ・ 第 4 回スタッフ研修と実践研究会当日のファシリテーターをして、自分がスタッフというよりは「みんながスタッフ」「みんなの中の一人」という気持ちが芽生えました。実際に参加するのと聞くのでは温度差があり、来年はまた他の保育士を誘って参加し、その「みんなに伝えたい気持ち」が伝染していくといいなと思います。
- ・ 「絵を読む会」への参加の仕方というか、姿勢がとても変わったように感じる。スタッフ研修で経験を繰り返すことで、様々な絵の見かたが出来るようになってきた。
- ・ 初めは実技研修が楽しかったけれど「絵を読む会」の方がもっと楽しみになりました。園内でも出来たらよいなと思うようになりました。
- ・ 「実践研究会」でスタッフや経験者がいろいろ意見を言っているのを、初めて参加した方は「へー」と頷いたりしていた。たった数回でも「絵を読む」という経験をして、自分は成長できているのかな?と感じ、こんな風にみんなが成長していけたらいいと思った。
- ・ 子どもに対するスタンスがすっかり意識できるようになりました(絵を受けとめる、読み取る、

とらわれない、など)。園に帰って研修報告しましたが、他職員も切に感じたようでした。もっともみんなに知ってほしい。それが子どもたちの育ちにつながるのだと思います。

- ・ 「大人の手を加えない」という考えが自分の中にしっかり柱になってきたと思います。造形の時間が楽しくなり、仕事上の楽しい時間がほんの少し増えて嬉しいです。
- ・ 経験したことを帰ってみんなに伝えたい、園でも取り入れたいと思いました。自分自身こんなに学びたい、もっと知りたいと思つての研修はなかったので驚いています。
- ・ 「絵を読む会」は何度も参加するにつれ意見も言えるようになった。色々な意見や考えが聞け、自分にはない考えを聞いたりすると、子どもは面白いな、楽しいなと思うことが多くあった。
- ・ 子どもの絵をうまい下手で見ず、言葉かけも変わってきたように思う。
- ・ まずは自分自身が楽しむことで、子どもたちにも伝わっていくのではないかと感じます。

V まとめ

石川幼年美術の会の登録スタッフは66名になったが組織はない。「できる時に、できる人が、できることを」率先してやっている。園の行事などと重なり「実践研究会」に参加できないことが分かっている保育者も「スタッフ研修会」に参加している。多忙でありながら学びたい人たちの集まりである。「第2回実践研究会」で案内に立っていたのはスタッフではなく、普段から早く登校する(参加者である)学生たちであった。「世界児童画展」の展示をしたのは本学美術学科の学生であった。美術学科の学生にとっても子どもの表現に触れるよい機会になった。「できる時に、できる人が、できることを」率先してやり、それを繋ぐのが、現在の「チーム石川」のスタイルである。

「上から言われて」「指示に従って」動くスタッフ、「行かなければならない」研修ではなく、学びたい人が自らの意思で集まり、参加者一人ひとりが主体となり「創り上げる」会を目指したい。

IV 5) 《スタッフとしての自身の変容》から言葉を借りるなら『スタッフと参加者の境界線がゆるやかで』従来の組織に比べると分かりにくい形かもしれないが、『自分がスタッフというよりは「みんながスタッフ」「みんなの中の一人」という気持ちが芽生えました。来年はまた他の保育士を誘って参加し、その「みんなに伝えたい気持ち」が伝染していくといいなと思います。』という言葉から、伝えたいことが確かに伝わっている手応えを感じる。

他の地域から遅れること40年、50年。ようやく小さな小さな芽が出たところである。大切に育てていきたい。そして、県内各地域の保育士会など主導で行っている研修や園内研修などと有機的に結びつき、刺激になり、石川の保育者が主体的に、楽しく、互いに学び合う文化が生まれることを願っている。

末筆になるが、石川幼年美術の会設立にあたりご支援いただいた多くの方々に感謝申し上げたい。